



「海外レポート① ナッソー」

デイドラ

Deirdre won the Nassau Stakes at Glorious Goodwood.

長期遠征で快挙を達成！



今年3月末のドバイターフを皮切りに海外を転戦していたデイドラが、長期滞在先のイギリスで快挙を成し遂げた。日本調教馬による英G1制覇は19年ぶり2度目。日本産の日本調教馬としては初。

「世界で最も美しい競馬場」の一つ、グッドウッド競馬場での戦いを振り返る。

平松さとし=文
text by Satoshi Hiramatsu

硬めの馬場になったことで
マーフィー騎手に力が入る

現地時間8月1日、英国グッドウッド競馬場で行われたナッソーS(G1)を日本のディアドラ(牝5歳/栗東・橋田満厩舎)が優勝した。

ナッソーSは3歳以上牝馬で争われる一戦。その年の欧州各国の1000ギニー(桜花賞に該当)やオークスを争った3歳馬(もちろん別路線もいるが)と古馬がいまみえる大レースだ。

決戦の地となるグッドウッド競馬場はロンドン市内から南へ約100キロ。イギリス海峡からも近いが標高341の高低い丘の上であり、景観の美しいコースとして名高い。

そんな舞台で行われるのがグロリアス・グッドウッド開催だ。日本では札幌や函館の北海道開催や新潟・小倉の開催も夏競馬として一種の趣を放っているが、海外でも夏競馬独特の開催というのが存在する。米国のデルマー開催や仏国のドーヴィル開催もその一つだが、英国では初夏にアスコット競馬場を舞台に王室主催で行われるロイヤルミレーティング(いわゆるロイヤルアスコット開催)やヨーク競馬場のイボア開催などが有名。そして、それらと並びこの国の夏競馬の風物詩として定着しているのがグロリアス・グッドウッド開催である。5日連続で行われる



ナッソーS (英G1)							
グッドウッド競馬場 8月1日 1着賞金340,260ポンド 3歳以上牝 芝1980m 良 9頭							
着順	馬番	馬名	性別	重量(kg)	騎手	タイム(着差)	調教師
1	①	ディアドラ	牝5	60	O.マーフィー	2:02.93	橋田 満(日)
2	⑨	メダーイー	牝3	56.5	L.デットーリ	1¼	J.ゴスデン(英)
3	③	ローダー	牝4	60	D.タドホープ	1¼	M.スタウト(英)
4	④	サンメイデン	牝4	60	J.ドイル	2½	M.スタウト(英)
5	⑦	ジャストワンダフル	牝3	56.5	W.ローダン	¾	A.オブライエン(愛)
6	②	ナイアレTTY	牝4	60	J.ファニング	1½	M.ジョンストン(英)
7	⑤	チャンネル	牝3	56.5	P.ブドー	½	F.グラファール(仏)
8	⑧	マクサッド	牝3	56.5	J.クローリー	2¾	W.ハガス(英)
9	⑥	ハモーサ	牝3	56.5	R.ムーア	38	A.オブライエン(愛)

※着差は先着馬からの着差を表示

※負担重量は次のとおりlbs(ポンド)をkg(キログラム)に換算。
9st 7lbs(133lbs)=60.0kg、8st 13lbs(125lbs)=56.5kg



S.Hiramatsu



S.Hiramatsu

5月1日に香港からイギリスに渡り、ニューマーケットで順調に調教が続けられてきた

Y.Maeda



マーフィー騎手は、昨年のサセックスSに続くこの開催でのG1勝利となった

Deirdre won the Nassau Stakes at Glorious Goodwood.

K.Yamamoto

この開催では、初日に長距離戦のグッドウッドC、2日目には欧州マイル路線を代表するサセックスS、そして3日目に行われるこのナッソーSなどG1がめじろ押しとなる。

天候の安定しない英国にあって、この開催は比較的好天に恵まれることも景観の美しさを際立たせている要因だが、そんな美しさに反して、起伏が激しくタフなコースとしても知られている。さらに今年の初日は激しい雨にたたられる場面もあり、ディアドラは英国初戦のプリンスオブウェールズS(G1)では道悪に泣いた(6着)だけに、またしても天が味方をしてくれないのか!? と思われた。しかし2日目以降は雲が多いながらも日も射す空模様となり、馬場は急速に乾いた。硬めの馬場になったことで拳を握る手に力が入ったのが今回初めてディアドラに騎乗するオイシン・マーフィー騎手だ。

「調教で乗り、日本の競馬もチェックしてディアドラが走る馬なのは分かっていた。日本馬向きの硬い馬場になったことでチャンスは広がると思いました」

9頭のメンバーから1番人気に推されたのは、英愛1000ギニー馬のハモイサ。キラ星のごとくスターホースがひしめくエイダン・オブライエン厩舎だが、3歳牝馬ではその中でもトップクラスだ。2番人気のメダーイーは

G1勝ちこそないものの前走でG2を圧勝。エネイブルやこのグロリアス・グッドウッドのグッドウッドC(G1)を制したストラディバリウス、同じくサセックスS(G1)を優勝したトゥーダーンホットらと同じジョン・ゴスデン調教師とランフランコ・デットーリ騎手のコンビということで、2番人気の支持を受けた。

他にもディアヌ賞(仏オークス、G1)勝ちのチャンネルなど、好メンバーが揃う中、3月にドバイへ遠征後、香港、英国と海外で転戦を続けつつも勝ち星から見放されているディアドラは、単勝21倍で7番人気タイ。低い評価しか得られなかった。

60kgの斤量を背負いながら
レースレコードでの勝利

しかし、陣営は勝利を信じて手を打っていた。レース2週間前の7月17日には馬運車でディアドラを一度、競馬場へ連れて行った。滞在するニューマーケットからグッドウッド競馬場までは普通の車でも3時間以上かかるロケーションだが、労を惜しまず連れて行くくと装鞍所からパドック、本馬場までをスクーリングさせた。

また、ニューマーケットには日本でもその景観で有名なウォーレンヒルという調教コースがあるが、ディアドラに跨る込山雄太調教助手はロングヒル

ディアドラ 今年の海外遠征成績

3.30	UAE	ドバイターフ(G1)	メイダン競馬場・芝1800m	4着
4.28	香港	クイーンエリザベスII世C(G1)	シャティン競馬場・芝2000m	6着
6.19	イギリス	プリンスオブウェールズS(G1)	アスコット競馬場・芝1990m	6着
8.1	イギリス	ナッソーS(G1)	グッドウッド競馬場・芝1980m	1着
(次走予定) 9.14	アイルランド	愛チャンピオンS(G1)	レパースタウン競馬場・芝2000m	



ディアドラ

2014年4月4日生 牝5 鹿毛
 父ハービンジャー
 母ライツェント(父スペシャルウィーク)
 馬主／森田藤治氏
 調教師／橋田満(栗東)
 生産牧場／ノーザンファーム
 通算成績／25戦8勝(うち海外6戦1勝)
 主な勝ち鞍／19ナッソーS(英G1)
 17秋華賞(G1)
 18府中牝馬S(GII)
 18クイーンS(GIII)
 17紫苑S(GIII)

やアルバハスリといった他のコースも積極的に使用しながら愛馬を仕上げていった。

それらが奏功し、レース前に現地へ駆けつけた橋田満調教師は「良い状態に仕上がっている」と感じた。

異国から挑む陣営に少しの運も微笑んだ。先述したように競馬当日は硬い馬場になった。ゲートインの順番もとくにリクエストはしていなかったが、たまたま最後入れになった。さらにメンバー構成を見て「流れが向きそう」と運を感じたのがマーフィー騎手だ。速い流れになると予測した彼は、日本の牝馬を道中後方3番手に控えさせる。そして直線では人気薄という気楽な立場も利用して、最内を突いた。その時の手応えは抜群だったとマーフィー騎手は語る。

「ゴールの2手前では勝てると確信できました」

その段階ではまだ中団の位置だったが、徐々に進出。ラスト200mでは2番手の並びまで上がり、前にいるのは早めにスパートしたデットーリ騎手操るメダーイーのみ。これ残り100mでとらえると、他にはもう追いつけてくる馬はいなかった。2着に粘ったメダーイーとの差は1馬身 $\frac{1}{4}$ 。活きの良い3歳勢を相手に60kgの斤量を背負いながら、日本馬としては2000年のアグネスワールド(ジュライC)以

長期滞在によって得られた勝利は英国入りしてからの変化の証。



18年ドバイターフ3着、18年香港C2着と惜しいレースもあったディアドラ。6度目の海外G1出走でついに勝利を掴んだ

来となる本場英国でのG1優勝を決めてみせた。

勝ち時計の2分2秒93は驚異的なレコード。この競走がG1となつたのは1999年だが、2016年までは現在より5ヤード(約4・6m)短い距離で施行されていたにもかかわらず、今回の時計より速いタイムで走り抜けた馬はただの1頭もいなかった。

「英国に長期滞在することでこちらの馬場に対応できるようになりました。長い上り坂のコースで勝てたのは日本の競馬にとっても意義のあることだと思います」

橋田調教師は真剣な表情を崩すことなくそう語った。4月に香港で走った後すぐに英国のニューマーケット入り。調教を見ながら橋田調教師は「走るフォーム自体、目に見えて大きく変わることはないと思うけど、筋肉のつき方は変わってきたと思います」と、語っていた。今回はそれを証明する走りとなったと言えよう。

今後に関しては愛チャンピオンS(G1)が有力で、登録のない凱旋門賞(G1)出走はなさそうとのことだが、他にもカナディアンインターナショナル(G1)やニューマーケットで仕上げてからのジャパンC挑戦というウルトラCを含め、いくつかの候補が上がっているようだ。新たな英国G1馬の今後の動向に注目したい。